

青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」 自己肯定感向上プロジェクト

創造的なダンスを用いた、児童青少年の自己肯定感向上プロジェクト

NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

【事業のポイント】

○創作ダンスを用いた体験活動を行い、自己肯定感向上における効果を検証する。

○推進会議において効果的な事業の実施方法、評価方法について検討を行うほか、創造的なダンスがもたらす「自己肯定感の向上」について、専門家を交えてディスカッションし、今後様々な現場で活用するための道筋や



こちかぜキッズダンス活動の様子(撮影:草本利枝)

1. 企画

(1) 事業実施の背景

私どもの団体では、H23年頃から、子どもたちの創造力・想像力・コミュニケーション力の向上を目的とした創作ダンスの授業やワークショップを、全国の小中学校(特別支援学校を含む)や保育園、学童保育所等で行っており、各現場でダンスが子どもたちの心身の成長に力を発揮する事を実感してきました。特に今年継続5年目になる「こちかぜキッズダンス」プロジェクトは、京都市の東山三条で行っており、その成果や実績をもとに、社会的に課題を持つ子どもにダンスを届ける機会を模索していました。

(2) ねらい

ダンスの特徴は、言葉や道具がいらない事、どこでも誰でもできる事です。ダンスの持つ力(創造力・想像力・コミュニケーション力)は、人が生きていく上で必要不可欠な力でもあります。また、創作ダンスは教えるダンスと異なり、一人一人のアイデアを活かす活動のため、知らなかった自分や友達のいいところを発見する学び多い活動です。このようにダンスを通して、児童青少年の心と身体への健康な成長を促す機会を創り出し、自己肯定感の向上につなげる機会とすることがねらいです。また本プロジェクトでの実践例、方法論をまとめて、全国的な普及のモデルケースとし、ゆくゆくはダンスを用いた体験活動そのものを、自治体や教育委員会等が主導して実施できるように、当団体としてはこれまでの実績と専門性を活かし、そのノウハウを伝える事で、ダンスの力を社会に活かしていきたいと考えています。

2. 実施概要

(1) 実施主体(運営体制)

主催・事務局統括 NPO法人JCDN(神前)／推進会議 委員長、オブザーバー 西田尚浩(京都市東山青少年活動センター シニアユースワーカー)／推進会議コーディネーター 岡本卓也(京都市東山いきいき市民活動センター館長)／アンケート調査 内田桃子(一般社団法人桃李教育会 代表理事、大阪大学大学院人間科学研究科)／オブザーバー 倉谷誠(京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化芸術企画課)／事務局補佐 小泉朝未(大阪大学文学研究科) 他

(2) 開催実績

月 日	内 容
10月14日(日)	第1回 推進会議
12月15日(土)	第2回 推進会議
1月20日(日)	第3回 推進会議
8月22日-11月4日	「こちかぜキッズダンス」①-⑪ ダンスワークショップ&成果上演
10月15日-1月12日	「出張ダンスワークショップ」① 京都府警察 少年サポートセンター 計3回
9月20日-11月4日	「出張ダンスワークショップ」② 平安養育院 体験1回、ワーク6回、計7回
2月-3月	アンケート調査分析、実施報告書冊子の作成

(3) 具体的な取組の概要

1) こちかぜキッズダンス

京都市東山区の東山三条地域を拠点に、地域の子どもを対象に2014年から継続するダンスのプロジェクト。2018年度は、地域の子どもの成長の機会として、参加者を一般公募し、地域内外の子ども同士の交流の機会を増やし成長を促すきっかけとした。

なお、本活動ではひとつの成果目標として地域のお祭りでの上演があるため、その衣裳や小道具などを子どもたち自身が創る美術ワークショップも行った。

2) 出張ダンスワークショップ

支援を必要とする児童青少年の集まりに出向き、普段の活動のひとつにダンスを取り入れる。

1、京都府警察 少年サポートセンター 体験活動

>> 過去に非行に走ったほか周囲の環境などに問題を抱えたお子さんが、再び非行に走ることなくまたは問題を改善し、健やかに成長できるように、お子さんとその保護者をサポートする「わかばサポート活動」の体験活動にダンスを取り入れる。

2、児童養護施設「平安養育院」こども祭り

>> 家庭で暮らすことが困難な児童が入所する当施設の1



(4) 新たな青少年体験活動の推進方策の検討と試行

・推進会議では、ダンスを通じた変化を多様に捉えるために、自己肯定感の向上を入り口に子どもたちの抱える課題やダンスの特性と、これまでの活動実績から導かれるダンスの可能性について事務局から報告を行ったのち、各委員と次のテーマについて意見交換を行った。＜評価の方法、自己肯定感とは何か、自己肯定感の向上が何をもたらすか、ダンスにおける自己肯定感向上の可能性、社会システムの中にどう取り入れ、活用していくか。＞

・会議の趣旨が上記の内容であったため、推進方策の検討においては、主たることは次回に持ち越しとなった。理由として、ダンスというジャンルが各委員にとっても初めて知る分野でありその理解の促進や、自己肯定感が向上すると何がよいのかといったそもそもの指摘が出されたため、会議の目的をゼロから話し合う必要があった。3回目の会議で推進方策の検討に至ったが、そこではダンスのほかに他のアートを活用する可能性も示唆された。また、ほかにダンスにおける体験活動の評価方法については長時間を割いて話し合いがなされた。

3. 成果と課題

(1) 事業成果

■事業担当者の主観による成果:

こちかぜキッズダンスと少年サポートセンターの活動では、子どもの変化が顕著に現れた。平安養育院の活動もやや日数が足りない難しさがあったものの、充実した活動になった。以下に現場受け入れ担当者の所感を転載する。

○こちかぜキッズダンス／三条学童保育所 職員の声

・ワークショップの後半は(いつもすぐ文句を言うが)、今年は文句も言わなかった。4年生の2人は変わってきたのかもしれない。3年生のKちゃんも変わってきた。みんな昨年とは表現の仕方が全然違う。今年のダンスの特徴もあって、自分の表現をしていた。

○少年サポートセンター 職員の声(京都府警察本部生活安全部少年課少年支援係 山崎さん)

・(少年たちは)いつもの活動では下を向いたままな事が多いのに、ダンスではとにかく笑顔が見えて良かった。いつもの活動では途中で飽きてしまう子が、最後まで楽しんでいたのにもびっくりした。解放されている様子もうかがえた。

・いつもの活動では少年からボランティアの大学生と触れ合うことはほとんどない。特にその傾向が強いSさんが、今日は休憩時間に大学生にタックルしたりしていて、驚いた。

・これまで行った体験活動の中で一番良い活動になった。少年サポートセンターの目的は2つあり、ひとつが自己肯定感を向上させること。そのために必要な「ほめる」という事を、ダンスは触れ合いながら上手に言ってあげられる活動だと感じた。

もうひとつが大学生と触れ合える活動を目指しており、今までなかなか触れ合うのが難しかったのが、ダンスで実現することができた。

・ボランティアの学生と、1回目のダンスWS終了後にたまたま話し合う場を持った時に、サポートセンターで行っている活動のなかで、どの活動が良いと思うか聞いたところ、学生たちが「ダンスが一番良かった。少年と話がしやすくなった。」と答えた。

・ダンスのほうがコミュニケーションが取れる。普通のスポーツでは味わえない身体の接触があるからではないか。

○少年サポートセンター 学生ボランティアの話:

・体を動かすことを通して自然に子供たちが心を開くのを感じた。自分たちがいまやっている事を感じている、楽しんでいる事が分かるので、ダンスはやりやすいと感じた。

また、いつもより子供たちとのコミュニケーションがとりやすいと感じた。例えば陶芸など作り物の活動だところらはあまり関われないが、ダンスのペアワークのように嫌でも組まないと成り立たないワークだったので自然とかかわりが生まれる。また、名前をつけていると呼びやすい効果もあった。初めての子は、ゲーム感覚の内容がやりやすかったと思う。最初の方はめんどくさいなどと言っていたがそのうちにやっていた。

○平安養育院 職員の声

・園長先生が子供たちをすごくほめていた。一度も練習を見れなかったが、本番をみて思っていた以上の完成度だったということ、職員会議や子供たちに何度も伝えてくれていた。

・お祭りの目玉として男女関係なく小学生—中学生まで一つの事に取り組めたのは、最近なかった(出し物として取り組んだのは初めて。登山などの行事はあるが、小中わかれる。これくらいの人数がやりたいと集まったのはなかった。)ので、すごく大きい事だった。それが子供たちの自信にもつながっていった。

・他にも取り組みがある中でダンスをやってみてのよさ、感じたことは、廊下でも、どこでもできる事。それで会話ができたり。その場で、じゃあ練習しようかとなり、それが生活にもつながっていく様子が見られた。そこから、ちょっと踏み込んで話ができるようになったりした。また、身体を動かすのは、単純に嬉しいしわかりやすい。

■アンケート調査の分析結果と展望:

・IKR評定用紙による事前/事後調査について対応のあるt検定を行ったところ、いずれの項目においても有意な差は見られなかった。ただし、記述統計を見ると、上位能力における「徳育的能力」が0.5ポイント、下位能力における「現実肯定」が0.1ポイント、「自己規制」が0.4ポイント上昇した。

・「いまどんな気持ち」ポスターを使用したアンケートにより参加児童の心理状態を分析したところ、全体として開始前は「うきうき」「どきどき」との回答が多く、ダンスを楽しみにする様子や今日は何が起こるのかという期待と緊張の入り混じる様子が見取れた。また、終了後は「やったー！」が最多であり、ワークショップに達成感を感じている様子が見受けられる。IKR評定用紙による調査において統計学的な自己肯定感の向上は見られなかったものの、「いまどんな気持ち」アンケートのこうした結果から、ダンスワークショップが達成感を中心とするポジティブ感情を引き起こしていることが示唆されており、そうした経験の積み重ねが自己肯定感向上に資するのではないかと考える。

課題:

・アンケート回答が難しい子どもが多く、ビデオ分析など言葉によらない方法や、量ではなく質的評価を加えて分析していく必要がある。この点、推進会議でもすべての委員から同様の指摘がなされた。

■各事業について

<推進会議>

・初めて出会う委員同士、自己紹介も必要であり、またひとつひとつの議題に対してたくさんの意見が提出されたが、それらを素材にさらに議論を深めるまでには、時間的に至らなかった。また、初めての取り組みであり4月入ってからプロジェクトの立ち上げであったため公官庁の担当職員を招くのは難しかった。1年目の実績報告書をもって、今後こうした方々を委員に招いて議論を行いたい。また、今年度の体験活動の出張ダンスワークショップを実施した、少年サポートセンター(警察官)や平安養育院の職員(児童養護施設支援員)など、初めてダンスの現場に立ち会われた職員を次年度は委員に招き、本委員会会議をぜひとも継続したい。冒頭にも触れたように創造的なダンスはまだ一般的に周知されていない活動であるため、様々な体験談や成果事例を積み重ねていく事で、米粒のようなひとつひとつの実践が大きな動きにつながる契機になると考えている。

<体験活動>

・子どもがアンケートに書く言葉について、いまだ改善は見られないものの、毎回同じ書きぶりである事、前期から後期にわたり続いた事を考えると、もしかすると大人に対する試し行動である可能性も捨てられない。低学年のころに比べて自分に接する大人の言動を理解できる年齢になってきており、あえて大人が求める回答を書かないようにしているそぶりが見られた。こうしたことから、次年度からアンケートの取り方についてはよくよく考えて実施する必要があると感じている。(こちかぜキッズダンス)

・ワークショップを行うだけではなくお祭りでの発表を目標にしたため、発表のためのリハーサルを行う時間も必要であり、全体的にワークショップで子どもとの密なコミュニケーションをはかる余裕が少し足りなかったかもしれない。アーティストも子供の様子になれるのにやや時間がかかった。(平安養育院)

■その他

・今後、事業を発展していく上で、活動に従事するアーティストやコーディネーターの養成はひとつの課題である。JCDNの別事業でアーティストを養成するスクールを実施しているが、同時にコーディネーターの育成も力を入れていく必要がある。

(3) 事業成果の普及啓発の課題

京都市、京都府の担当課と組んで事業を行うくらいの規模に展開する事。現在、京都市では「文化芸術による共生社会実現のための基盤づくり事業」を推進中であり、担当係長とは連携を図っている。ダンスは他の芸術ジャンルに比べるとほとんど知られていないため、こうした独自に行う事業にて成果を積み重ね提案材料を増やしていく事から始めなければならない。今年作成する報告書がそのように活用されることを想定し編集している。また、他の自治体でも同じように参考になる資料とすることを目指している。

4. 団体プロフィール

1. 団体名 NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)
2. 代表者役職・氏名 理事長 佐東範一
3. 住所 〒600-8092 京都市下京区神明町241 オパス四条503
4. 電話番号 TEL:075-361-4685
5. URL <http://www.jcdn.org>



<活動の目的>

ダンスは言葉や道具を使わずに、自分自身の身体を使って表現しコミュニケーションするという他の芸術にはない特徴を持っています。“自分を見つめる力”“自己表現力”“他者との関係性を創る力”、これらがダンスを形創るための大きな力です。これらの力は同時に、人間が生きていく上で不可欠な“生命力”である、とも言えるのではないのでしょうか。これからの日本の社会を考える上で、新たなる“生命力”を育てていくこと、それが現代社会において求められていることであり、ダンスの持っている力なのです。ダンスの持っている力を社会の中で活かしていくこと、子供から老人まで日常生活の中でダンスに触れる機会を創ること、その為の環境を創る